カンテンイタビ(Ficus awkeotsang M.)の導入について

誌名	研究報告 / 沖縄県森林資源研究センター
ISSN	18821855
著者名	生沢,均 古堅,公 平田,功
発行元	沖縄県森林資源研究センター
巻/号	52号
掲載ページ	p. 24-25
発行年月	2011年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council Secretariat

カンテンイタビ（*Ficus awkeotsang M.*）の導入について

生沢　均・古堅　公[1)]・平田　功[2)]

1．はじめに

カンテンイタビは、台湾省原産の種で、水をカンテンのように固まらせる酵素を持ち、台湾省では夏場の飲料として親しまれている[1)]。本県には、写真－1、2に示すカンテンイタビの近縁種のオオイタビ（*Ficus pumila L.*）が生育し、海岸の岩上、集落の石垣や樹上の広い地域で生育している。

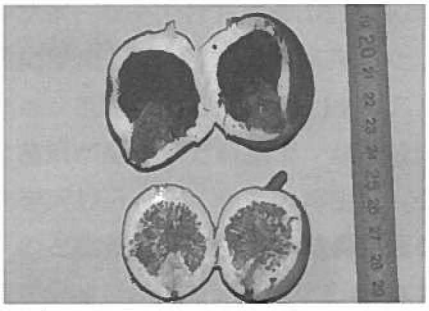
筆者らは、カンテンイタビの果実の産業的な利活用と、緑化利用を目指して、台湾省林業試験所の協力を得て苗を導入し、本年結実が見られたので報告する。

2．結果及び考察

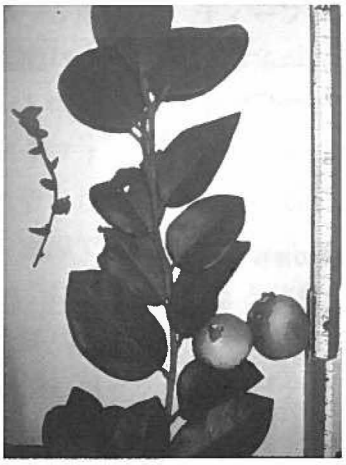
本種の導入は、平成7年8月に台湾省林業試験所福山分所より挿し木苗により多数導入した。導入した苗は、当センター構内の各所に植栽した。また、土壌別に挿し木を行ったが、海砂及びバーミキュライトでの発根は18本／20本と、極めて良好であったが、国頭マージ及びクチャーでの生育は、0～2本/20本と極めて不良であった。また、挿し木の部位別では、石垣等を被覆する幼形枝の幹部分は挿し木できるが、大型の葉を出す木化した枝では挿し木できないことが分かった。この結果から、挿木には幼形枝の緑枝や半熟枝が望ましい。

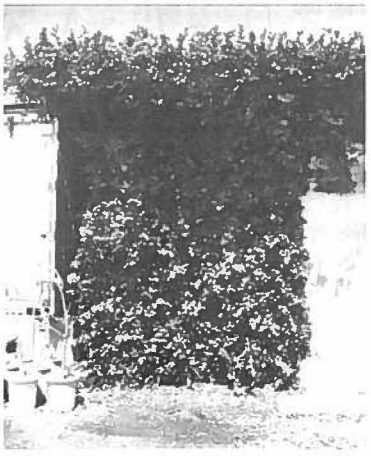
カンテンイタビの結実については、これまで10年経過した平成17年には、雄実は確認したが、雌実は確認できなかった。

しかし、今回（平成22年11月下旬）雌実を確認した（写真－3）。この種の結実には、コバチの存在が欠かせないが、今回の結実からコバチが種子内に侵入し、受粉させたことが明らかであるが、台湾産のコバチ（*Blastophaga pumilae*）かオオイタビのオ



写真－1　オオイタビ
上：雄実　下：雌実





写真－2　オオイタビ（*Ficus pumila L.*）
写真左：幼形と木化枝と実　写真右：壁面を覆うオオイタビ

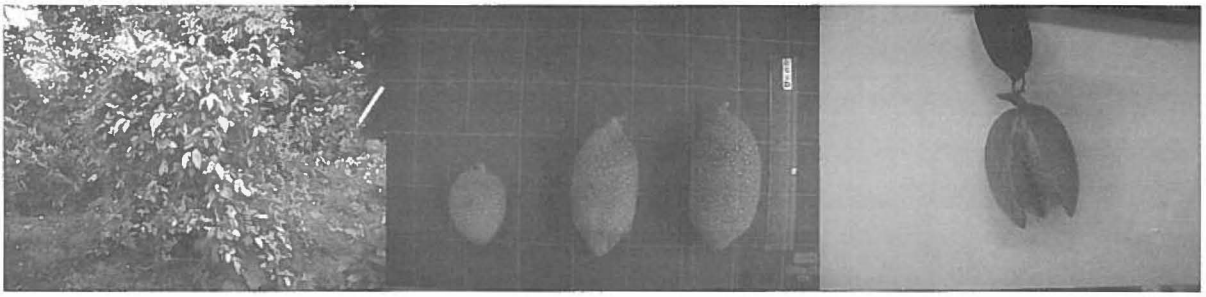
[1)] 森林組合連合会、[2)] 森林緑地課

オイタビコバチ（*Blastophaga pumilae*）のいずれが、関与したかは不明である。さらに、いずれのコバチとも、学名が同じである。

また、結実した種子を50粒蒔き14日目で発芽を確認した。その後、24日目で18本（36%）発芽した（写真－4）。

引用文献

1）愛玉子専論　台湾省林業試験所　1991.6 PP.127



写真－3　カンテンイタビの植栽状況と果実

写真中：左オオイタビ、中・右カンテンイタビ　写真右：カンテンイタビの裂果

写真－4　カンテンイタビの発芽状況